

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 13 CONTENTS

A case of stone producing area at the Simazu family graveyard
of the Satsuma domain and a soul grave.

Tadahiro Kurokawa

About a syone wall Kagoshima castle after Genroku.(2)

Shiro Abiru

Producing area tilea made in Mashiki Town,Kumamoto Prefecture.

Shiro Abiru

〈Introduction of materials〉

Product made of fang from Euchi Shell mound.

On the Way Class Practice.

Tatsumi Yubasaki

View for the Archaeological Cultural Prorerties Management
in Kagoshima Prefecture based on Statistical Data

Kouichirou Mori

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 31th year in Heisei & 1st year in Reiwa

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
March 2021

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第13号

薩摩藩主島津家墓所における石材産地の一事例と招魂墓
黒川 忠広

鹿児島城跡元禄以降の石垣について(2)
阿比留 士朗

熊本県益城町所在土山瓦生産地について
阿比留 士朗

〈資料紹介〉江内貝塚出土の牙製品

ワクワク考古楽(授業支援)の実践について
湯場崎 辰巳

統計資料からみる鹿児島県の埋蔵文化財保護の
これまでと今後の展望
森 幸一郎

平成31・令和元年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2021.03

研究紀要・年報

縄文の森から

第13号

二〇二一

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第13号 目次

薩摩藩主島津家墓所における石材産地の一事例と招魂墓

黒川 忠広・・・・ 1

鹿児島城跡元禄以降の石垣について（2）

阿比留 士朗・・・・ 9

熊本県益城町所在土山瓦生産地について

阿比留 士朗・・・・ 14

〈資料紹介〉 江内貝塚出土の牙製品

・・・・ 19

ワクワク考古楽（授業支援）の実践について

湯場崎 辰巳・・・・ 21

統計資料からみる鹿児島県の埋蔵文化財保護の
これまでと今後の展望

森 幸一郎・・・・ 31

平成31・令和元年度年報・・・・ 45

薩摩藩主島津家墓所における石材産地の一事例と招魂墓

黒川忠広

A case of a stone producing area at the Shimazu family graveyard of the Satsuma domain and a soul grave

Kurokawa Tadahiro

要旨

近世大名墓である薩摩藩主島津家墓所（福昌寺跡）に所在する宝塔のうち、島津斉彬の男子3名の墓碑は、蒲生御仮屋文書の中の『蒲生道方普請見廻役日帳』の記述から始良市蒲生町下久徳より切り出されたことがわかる。また、これらの墓碑のうち、埋葬主体を伴わない招魂墓は宝塔形で、埋葬主体を伴う場合は宝篋印塔であった。埋葬主体の有無により墓碑の形式を違えていることを明らかにすることが出来たことは、葬送儀礼と祭祀の作法が墓碑を含む石造物にも形式を違えて反映されていることを示す。

キーワード 島津家墓所、石造物、蒲生御仮屋文書

1 はじめに

鹿児島における近世墓の調査研究は、複数の自治体が一体となって進めた鹿児島島津家墓所の取り組みによって大きく進展した。大名墓や一門家を中心とした墓所について、今後進むべきひとつの姿を提示すると共に、調査研究の基礎資料がていねいにまとめられた¹⁾。

筆者は、島津家墓所担当者会に参加するなかで、石造物に関して多くの事例や知見を得ることが出来た。今回紹介する資料についても、その出発点は島津家墓所担当者会にある。

大名墓を含めた近世墓の調査においては、現地での石造物調査は言うまでもなく、文献調査は欠くことの出来ない作業である。筆者は、幸運にも文献史料に精通する人々を通して膨大な史料を実見する機会も得た。この経験を元に、近世墓をはじめとする石造物について紹介していきたい。

今回取り上げる石造物は、鹿児島市にある薩摩藩主島津家墓所内の大名子女の墓碑である。大名は、系図や記録類が充実しており、墓碑の年代観や人物関係などの情報を得るには比較的容易である。その一方で、埋葬者以外に関する情報は必ずしも明確とは言い難い。これを如何に文献史料で補完するかが鍵となる場合も多い。

今回紹介する墓碑は、『蒲生御仮屋文書』の中にある『蒲生道方普請見廻役日帳』に石材産地の情報が記載されているものである。はじめに、この史料を元にして、薩摩藩主島津家墓所内における石材産地がわかる1事例を紹介していきたい。そして、薩摩藩主島津家墓所の石造物から見た葬送儀礼と墓碑形式との関係についても言及していきたい。

2 蒲生御仮屋文書と薩摩藩主島津家墓所

蒲生御仮屋文書とは、蒲生郷で記録された日記などの総称であり、『島津斉彬蒲生巡見』や『幕府禁令・廻文等』など、当時の情報を豊富に納めた史料群である。この中に『蒲生道方普請見廻役日帳』がある。嘉永2・3年の日帳が残されており、尾口義男氏によると、「島津斉彬の男児二人が相次いで夭死した直後の嘉永二年二月と同三年九～十月の記事中には、二人の石塔用（墓石）の石材調達のために藩作事方の役人が石切数名を連れて重富郷の下久徳村石場に出向」している点を特筆している（尾口2018）。

その斉彬の男児の墓碑は、薩摩藩主島津家墓所内にある。この墓所は、鹿児島市池之上町に所在する島津本宗家の墓所で、島津家6代から28代までの墓石等を含む800基を越える石造物からなる。発掘調査や石造物調査などが進められ、『薩摩藩主島津家墓所（福昌寺跡）調査報告書』として報告書が刊行され（以下、報告書と表記）、他の一門家と共に令和2（2020）年に国の史跡に指定されている。この墓所は、島津家の菩提寺福昌寺の一角にあったが、廃仏毀釈により寺院は失われ、島津家墓所一帯のみが当時の様子を今に伝える。

先に紹介した日帳に記された墓碑は、重豪墓の右側に位置している。これらの墓碑は、元々惠燈院に設置されていたものを昭和50年代に現在の地に移設されたもので、原位置ではないことが判明している。この惠燈院とは、『三国名勝図会』の記述によると、はじめは開山堂の西にあったが、安永2（1773）年に福昌寺前の龍門橋の前に移転したとされる。現在これらはD区と呼ばれる

エリアに再設置されている（第1図）。報告書では、いずれも、変形塔形と分類され、その石材は阿多火砕流起源の溶結凝灰岩で、報告書分類で阿多②とされている。第2図は、篤之助の墓碑実測図である。欠落部分は周辺と同形式墓碑から補い復元した。墓碑は、基礎から宝珠まで復元高約190cmを測る。宝珠は正面観が丸みを帯びるも、4つの稜を有する。塔身は石燈籠の火袋状を呈し、正面に火口を模した浅い円形の彫り込みが見られ、外の3面に加工はない。塔身と基礎にはそれぞれ反花と請花とが組み合わさるように加工が施されている。基礎を設置する土台には3枚の平石が用いられている。この特徴は、寛之助と盛之進の墓碑もほぼ同じで、さらに周辺のものも若干の差はあるにせよ同程度である。このことから、規格の存在が指摘出来よう。

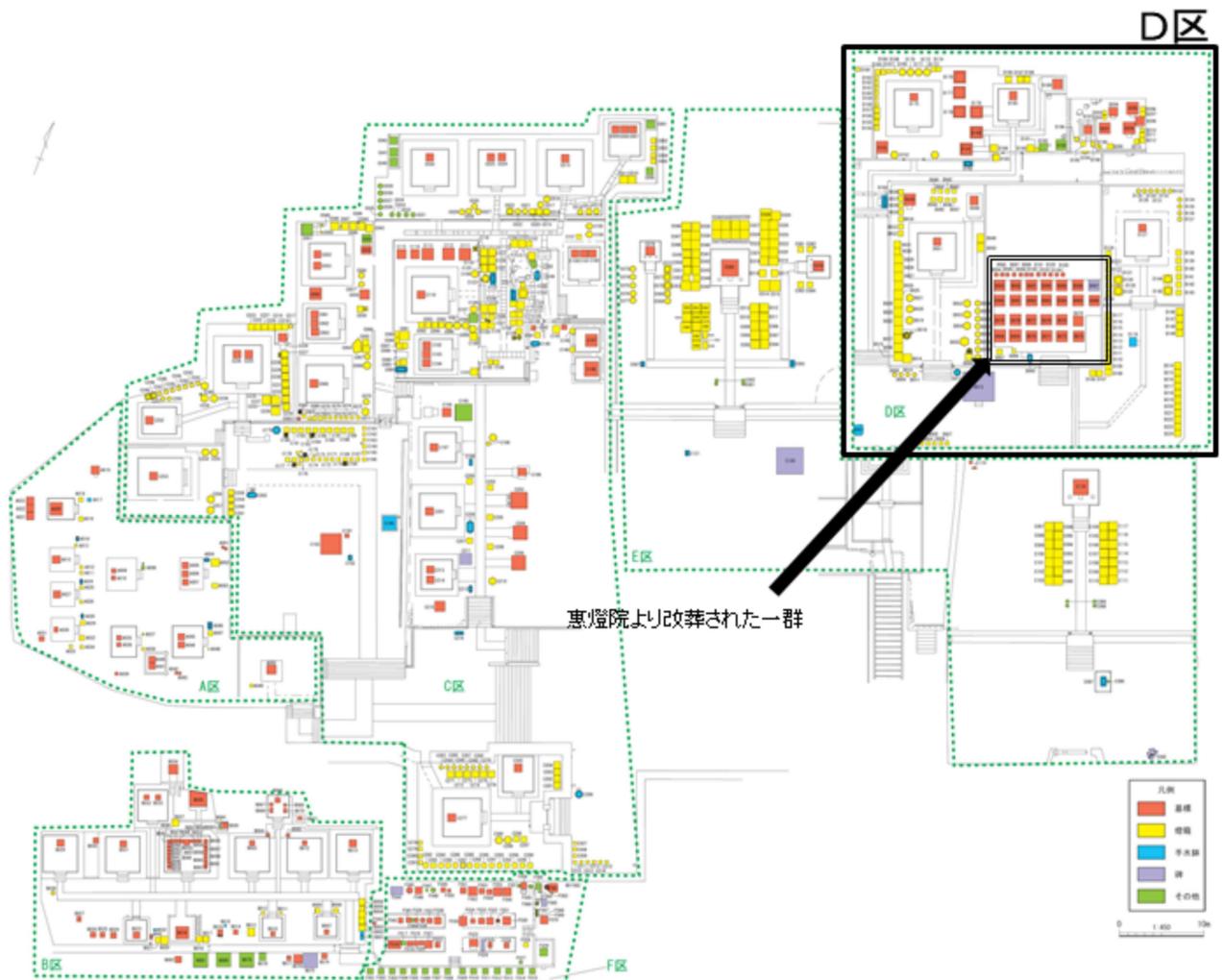
次に、『蒲生道方普請見廻役日帳』の記述と島津家墓所に残る墓碑について見ていきたい。

まず、二男寛之助は、横瀬三郎兵衛克巳の娘を母として、弘化2（1845）年7月28日生まれで嘉永元（1848）

年5月5日死去。院殿号を麗光院。8か月後の2年1月30日に「一今日、御夭亡様御石塔為御取調方、御作事方下目付是枝助之進殿差入有之段、当番所ヨリ申来り候二付、（以下略）」という記録が見られる（始良市2018）。

次に、三男盛之進は、田宮安知の娘を母として弘化4（1847）年11月29日生まれで嘉永3（1850）年10月4日死去。院殿号を盛光院。2か月後の12月4日に「一今日、盛光院様御石塔御取調方とシテ、御作事方下目付高崎孫四郎殿・石切山次宗之進、外ニ老人差越有之筈ニ而、（以下略）」という記録が見られる。この他に、作業工期がわかる記述として、12月12日に「一御石塔石調取方、今日迄相済、下久徳村百姓共ヨリ持方いたし候」という記録も続く（始良市2018）。

最後に、四男篤之助は、伊集院兼珍の娘を母として嘉永元（1848）年11月23日生まれで嘉永2（1849）年6月22日死去。院殿号を篤入院。3か月後の9月26日に、「一今日ヨリ 篤入院様御石塔取調方とシテ御作事方御下目付是枝助之進殿并石切兩人、下久徳村江御差入有之、（以



第1図 薩摩藩主島津家墓所石造物配置図

下略)という記録が見られる。また、10月14日には、「一御石塔御取調方惣成就ニ而、御下目付并石切同道ニ而、四ツ半時分ヨリ御帰り有之候事」と藩の役人が帰鹿する状況も窺い知れる(始良市2018)。

このように、『蒲生道方普請見廻役日帳』では下久徳村から実際に石材を切り出したことを裏付ける複数の記

述を確認する事が出来る。なお、報告書では江戸の大円寺に墓誌があるとされ、尚古集成館の『御祭祀提要』によれば、この3名は江戸で亡くなり埋葬されていることがわかる。この時点で、福昌寺に残る墓碑は当初の惠燈院においても埋葬主体を有していなかった可能性が指摘出来よう。『御祭祀提要』では、これらを招魂墓と位置づけている(田村1991)。

3 蒲生から吉田一帯に分布する黒色溶結凝灰岩

下久徳村(現始良市蒲生町下久徳:第3図)にはどのような石材が産出されるのであろうか。蒲生周辺の石材について先行研究等を振り返ってみたい。平田信芳氏は、加治木石には二瀬戸石(白石)と桃木野石(黒石)があった事を指摘するも、「桃木野石のことはほとんど伝承されておらず」詳細がわからなくなってしまったと述べている(平田1995)。大木公彦氏は、阿多火砕流として岩相が2つに分けられる点を述べ、その1つについて、「細粒均質な黒色凝灰岩から黒色溶結凝灰岩で、ユータキシティック構造はほとんど認められない」という特徴と「鹿児島市と始良市の境界付近に流れる思川と別府川流域にも阿多火砕流の溶結凝灰岩が分布し、蒲生龍ヶ城の城壁として使われた溶結凝灰岩には梵字が刻まれている。この地域の溶結凝灰岩も石材として使われているが、石材名はわからない」として分布域や課題を示しつつ石切場の情報収集が急務であることなど多岐にわたる指摘をした(大木2015)。この見解を元に薩摩藩主島津家墓所をまとめた藤井大祐氏は、阿多火砕流を「②鹿児島市



第2図 篤之助墓碑実測図(s=1/20)



第3図 始良市蒲生町下久徳の位置図

表1 天死者一覧

名前	藩主	生年月日				没年月日				石造物ID	墓碑形式	石材			
		和暦	年	西暦	月	日	和暦	年	西暦				月	日	
悟姫	重豪	宝暦	13	1763	10	13	明和	元	1764	7	26	D	74	六角柱状基壇	阿多②
於厚	重豪	安永	5	1776	3	15	安永	7	1778	6	13	D	68	塔身石仏	阿多②
於克	重豪	安永	5	1776	11	10	安永	7	1778	5	3	D	153	宝篋印塔	阿多②
牧姫	重豪	安永	7	1778	1	14	天明	4	1784	7	26	D	69	塔身石仏	阿多②
男子	重豪	天明	2	1782	3	18	天明	2	1782	3	23	D	178	宝篋印塔	阿多②
亀五郎	重豪	天明	4	1784	2	28	天明	4	1784	7	29	D	70	六角柱状基壇	阿多②
感之助	重豪	天明	5	1785	8	17	天明	6	1786	4	11	D	71	六角柱状基壇	阿多②
為次郎	重豪	寛政	2	1790	12	21	寛政	8	1796	7	5	D	72	宝塔	阿多②
乘之助	重豪	寛政	7	1795	6	29	寛政	9	1797	3	7	D	73	宝塔	阿多②
蓮之進	重豪	寛政	10	1798	6	21	寛政	11	1799	7	20	D	83	宝塔	阿多②
豹治郎	重豪	享和	2	1802	11	28	文化	元	1804	3	3	D	84	宝塔	阿多②
富姫	重豪	文化	5	1808	10	6	文化	8	1811	1	8	D	85	宝塔	阿多②
剛之進	斉宣	寛政	10	1798	3	19	寛政	10	1798	3	29	D	177	宝篋印塔	阿多②
壽姫	斉宣	寛政	11	1799	9	2	享和	元	1801	8	17	D	86	宝塔	阿多②
職之助	斉宣	寛政	12	1800	7	17	享和	元	1801	4	12	D	180	宝篋印塔	阿多②
武五郎	斉宣	享和	2	1802	5	15	文化	9	1812	2	22	D	189	宝篋印塔	吉野
於美壽	斉宣	享和	2	1802	5	20	享和	2	1802	9	17	D	179	宝篋印塔	阿多②
泰之進	斉宣	文化	3	1806	2	4	文化	3	1806	2	28	宮之城島津家墓所にあり			
於幹	斉宣	文化	6	1809	1	30	文化	6	1809	8	14	D	181	宝篋印塔	阿多②
範之進	斉宣	文化	6	1809	2	6	文化	6	1809	8	12	D	176	宝篋印塔	阿多②
清二郎	斉宣	文化	14	1817	1	12	文政	2	1819	1	25	D	79	宝塔	阿多②
瑞姫	斉宣	文政	2	1819	4	23	文政	3	1820	6	19	D	78	宝塔	阿多②
夙之丞	斉宣	文政	6	1823	5	23	文政	10	1827	9	11	D	77	宝塔	阿多②
信八郎	斉宣	文政	7	1824	8	30	文政	9	1826	10	26	D	93	宝塔	阿多②
知姫	斉宣	文政	10	1827	6	15	文政	12	1829	4	7	D	92	宝塔	阿多②
智姫	斉興	文化	12	1815	12	28	文化	13	1816	8	10	C	58	宝篋印塔	阿多②
男子	斉興	文化	13	1816	5	29	文化	13	1816	6	3	C	60	宝篋印塔	阿多②
諸之助	斉興	文化	14	1817	3	17	文政	2	1819	4	18	D	91	宝塔	阿多②
珍之助	斉興	文政	2	1819	2	13	文政	3	1820	8	16	D	90	宝塔	阿多②
唯七郎	斉興	文政	3	1820	4	22	文政	4	1821	4	5	C	113	宝篋印塔	阿多②
善次郎	斉興 養子	文政	6	1823	1	11	文政	6	1823	2	11	D	89	宝塔	阿多②
濤姫	斉興	天保	元	1830	6	19	天保	2	1831	6	10	D	88	宝塔	阿多②
菊三郎	斉彬	文政	12	1829	8	3	文政	12	1829	9	11	C	103	宝篋印塔	山川石
澄姫	斉彬	天保	8	1837	8	6	天保	11	1840	6	30	D	80	宝塔	阿多②
邦姫	斉彬	天保	9	1838	10	24	天保	11	1840	5	24	D	81	宝塔	阿多②
寛之助	斉彬	弘化	2	1845	7	28	嘉永	元	1848	5	5	D	82	宝塔	阿多②
盛之進	斉彬	弘化	4	1847	11	29	嘉永	3	1850	10	4	D	75	宝塔	阿多②
篤之助	斉彬	嘉永	元	1848	11	23	嘉永	2	1849	6	22	D	76	宝塔	阿多②
虎寿丸	斉彬	嘉永	2	1849	4	2	安政	元	1854	7	24	C	104	宝篋印塔	山川石
哲丸	斉彬	安政	4	1857	9	9	安政	6	1859	1	2	C	252	宝篋印塔	山川石

北部沿岸へ至る地域及び志布志地域。黒色を呈し、細粒均質でユータキシティック構造はほとんど認められない。異質岩片が少ない。(中略) 石材名は、「花尾式」「蒲生石」「桃木野石」「黒石」などがある」とまとめた(鹿児島市2017)。また、深野信之氏は始良市内の島津家墓所をまとめるに際して、「かつて「加治木石」の一種とされた「桃木野石」は黒石と呼ばれており、阿多火砕流の溶結凝灰岩と考えられる。最近石切場が確認されたため、今後調査を行う予定」とされた(始良市教委2019)。ここで示された石切場がどこか筆者は知り得ないが、報告を待ちたい。

これらを踏まえ、改めて3名の墓碑を観察すると、蒲生城跡の一角にある竜ヶ城磨崖一千梵字仏蹟周辺や吉田松尾城跡採石場などの黒色を呈する溶結凝灰岩と類似している(第4図)。前出の『蒲生道方普請見廻役日帳』から、石材を蒲生町下久徳から切り出していることが記



第4図 松尾城跡の位置

されており、両者から、これらの墓碑は原産地を示す資料として位置づけが可能であると言える。

4 考察

報告書によると、これらの石造物は変形塔形と形態分類され、第2図に示したように、通常見られる宝篋印塔とは笠部の形状や基礎等が異なる。恵燈院から移設された石造物の大半がこのような形状を呈しており、これを宝塔の一種と捉えて進めていきたい²⁾。

薩摩藩主島津家では、江戸時代後半の重豪・斉宣・斉興・斉彬の4名の藩主には多くの子女があり、また、夭死者も多い。

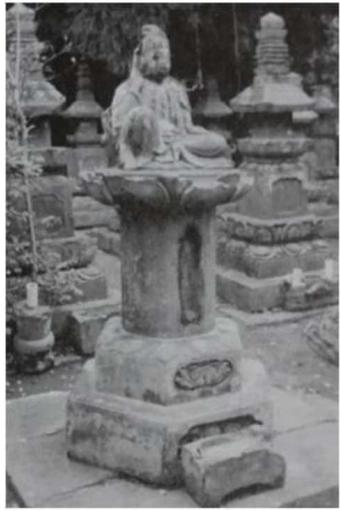
はじめに、『御祭祀提要』から夭死した子女を表1に示し、人物関係を整理したい。重豪子女12人、斉宣子女13人、斉興子女7人(養子含む)、斉彬子女8人と幕末までの約100年間でわかっているだけで40人となる。

次に、現存する墓碑と合わせて考えたい。仏像形2例

と、六角形基壇の3例が認められるも、注目すべきは、墓碑の形態が大きく2つに分かれることであろう。すなわち宝篋印塔と宝塔である。宝篋印塔の11名は、大名墓と同等の基壇を有して山川石製のものが3例、台石が地面に直接置かれているもので、石材が阿多②のものが8例とさらに細分出来る。前者の3名とは、斉彬正室英姫の子で長男菊三郎、嘉永4年3月3日に世子となった虎寿丸、安政5年3月23日世子となった哲丸の、いずれも男子である。つまり、世子あるいは世子相当の場合、藩主・夫人に用いられるスタイルを踏襲する、ということが指摘出来る。ちなみに、哲丸以外は江戸で亡くなっている。後者の、宝篋印塔で阿多②である子女は、C・D区にあり、『御祭祀提要』によると福昌寺に埋葬されたとある。このことは取りも直さず鹿児島で生まれた可能

表2 藩主の所在と子女の出生地等の関係

藩主	名前	和暦	月	日	所在	出生	出典							
重豪	於克	安永	4	4	21	江戸発		旧記追録6-1257						
				6	4	鹿児島着								
		天明	5	1		鹿児島着	10月前							
				4	21	鹿児島発			旧記追録6-1366					
				6	5	江戸着								
				11	10		出生							
	男子	安永	10	3	28	江戸発		旧記追録6-1748						
			天明	1	5	15	鹿児島着							
				5		鹿児島着	10月前							
				6	21	鹿児島発			旧記追録6-1790					
				7	27	江戸着								
			2	3	18		出生							
職之助	寛政	11	11	3	25	江戸発		旧記追録7-528						
				5	15	鹿児島着								
		天明		9		鹿児島着	10月前							
						鹿児島発			旧記追録7-529					
						江戸着								
				12	7	17		出生						
	享和	1	3	1	3	27	江戸発		旧記追録7-615					
					5	16	鹿児島着							
		武五郎	2	1	1	15	鹿児島発	10月前		旧記追録7-652				
						3	3	江戸着						
			天明		5	15		出生						
斉宣	於美壽	享和	1	3	27	江戸発		旧記追録7-615						
									天明	5	16	鹿児島着	10月前	
		2	1	15	鹿児島発									
								3		3		江戸着		
		5	20											
								於幹	文化	4	9	6	江戸発	
	天明	5	3	鹿児島着	10月前		旧記追録7-958							
									7	21	鹿児島発			
		9	9		江戸着									
									6	1	30			
	範之進	文化	4	9	6	江戸発								
								天明	5	4	鹿児島着	10月前		旧記追録7-958
7		21	鹿児島発											
							9		9		江戸着			出生
6		2	6											
							斉興	智姫	文化	12	2		江戸発	10月前
5	25	江戸発												
						7								
唯七郎	文政	2	4	22	江戸発				旧記追録7-1673					
						5				9	鹿児島着			
3	2		鹿児島発			旧記追録7-1728								
							4	22		江戸着			出生	

墓碑			
	六角形	六角形	四角形
	石仏形	宝塔形	宝塔形
年代	1778・1784	1784・1786	1796～1850
	古  新		

写真は報告書より引用

第5図 招魂墓形式変化の方向性

性があり、『旧記雑録』からそれぞれの出生地を探ってみたい。大名は参勤交代で江戸と国元を往来しており、出生日から逆算した頃の藩主は鹿児島に在る必要がある。子女の生年月日から機械的に10か月差し引き、その時点の藩主の所在を旧記雑録などの記録類から調べ、表2にまとめた。この作業により、智姫以外は全て藩主の鹿児島滞在を確認する事が出来た³⁾。

よって子女の墓碑は、埋葬を伴う場合、墓碑の形式は宝篋印塔で石材は非山川石として阿多②が多用される。埋葬主体を伴わない場合は、今回紹介した形式で石材は非山川石として阿多②が多用されることがわかる。埋葬主体の有無と上位に設置する墓碑の形式とはセットであると指摘出来よう。

さて、この宝塔の島津家墓所内における初出は重豪の子で寛政8（1796）年に夭死した為五郎からで、嘉永3（1850）年の盛之助までの江戸後半期約50年間に渡りこのスタイルが用いられていることがわかる。江戸後半の薩摩藩主の夭死した子女の招魂墓碑は、現存する限りでこの形式だったと指摘することが出来よう⁴⁾。では、そもそもこのスタイルはいつ確立したのか。改めて表1を見ると、明和元（1764）年から天明6（1786）年にかけて、六角柱状の基壇を有する一群がある。塔身が欠落して不明な1例があるも、塔身が石仏である2例と六角柱状基壇の宝塔2例とがあり、夭死年から見ると、石仏か

ら宝塔形へ塔身が変化している（第5図）。埋葬を伴わない招魂墓に異なる形式の墓碑を用いる概念は、この頃には既に成立していたと言え、やがて形式が統一されていったと考えられる。成立の背景に関しては、稿を改め江戸初期から整理していきたい。

最後に、なぜ夭死者の墓碑は阿多②を選択したのだろうか。これらの産地が下久徳周辺であるとするならば、当時は蒲生郷に属する。重年以前は夭死者が少なく、重豪以降になると子女の数も格段に増加し、夭死者も多い。重年・重豪の出自が加治木島津家であり、加治木家が多用している石材が「桃木野石」すなわち阿多②であり、この出自の系譜は留意しておきたい。ちなみに、類似する石材は吉田松尾城跡近くの採石場からも産出され、石材産地としての広がりが見受けられる。このため、「桃木野石」を包括した名称が現時点では有効かと思われる。いずれにせよ、城下で多用される吉野火砕流起源の「たんたど石」を用いる城下土とは何かしらの区別を求めた可能性もあり、今後、各地の墓碑を調査することで明らかにしていきたい。

5 おわりに

以上述べてきたことを整理したい。『蒲生道方普請見廻役日帳』から始良市蒲生町下久徳には阿多溶結凝灰岩

亡くなった場所	鹿児島	江戸
鹿児島島の状況	埋葬	招魂
墓碑形式		
	宝篋印塔	宝塔

第6図 埋葬地と墓碑形式の関係

の石切場が存在していたことが明らかとなった。そして、福昌寺跡の島津家墓所にある斉彬の男子3名の墓碑は、原産地がわかる基準資料と位置づけられる。また、これらの墓碑はいわゆる招魂墓で埋葬主体を伴わず、埋葬主体を伴う場合は宝篋印塔であった。埋葬主体の有無により墓碑の形式を違えていることを明らかにすることが出来た(第6図)。これは、葬送儀礼と祭祀の作法が墓碑を含む石造物にも形式を違えて如実に反映されていることに他ならない。本来であれば、ここで分類名や形式を提示すべきであろうが、類例調査が十分でなく、埋葬主体との関係も発掘調査を実施していないため仮説の域を出ない。福昌寺跡内での墓碑移設の可能性の検証など、解決しなくてはならないことも多い点は筆者自身留意しておきたい。

さて、『蒲生道方普請見廻役日帳』に話を戻すと、嘉永2年10月11日の記録に、「城ヶ崎ノ下迄持方いたし」と、人力で運搬したのち川船で輸送されたことや、「老人前ニ三百四十八文」と、その際の賃金についても記されている(始良市2018)。筆者が改めて言うまでもなく、近世は多くの文献史料が残されており、関連する様々な事象を読み解くことが出来る。例えば、『名越時敏史料』では、文久2(1862)年5月18日の記録として4月8日に死去した父盛胤の墓石や石燈籠についての記述がある。「得宣院様御墓石建、石工野元休次郎、拙者銘書イタシ候(中略)御石ハ野屋敷石場ヨリ出ル、御台ニ犬ヲ刻差上候ハ兼テ犬御好故ナリ」と生前の好物を彫刻する風習があったことを裏付けるような記述もある(鹿児島県2011)。

これらの史料を、現存する石造物や石材産地と結びつけ、現在急速に失われようとしている墓石文化の記録を残していくことも、考古学が果たす役割の1つであると考えている⁵⁾。大名を頂点とした江戸時代の階層社会において、階層と石材やその加工(装飾)技術との関係や、埋葬主体と墓碑との関係など、考古学的手法によって導き出される視点が、当時の社会をより多角的に捉える資

料となる。さらに、対象物を広げることで比較資料が生まれ、当時の社会を解明する手掛かりとなり得る。不慣れな部分は更に精進してこれらの課題に取り組んでいきたい。

日頃から多くの方々より様々な御教示を頂いている。末筆ながら名を記して感謝したい。
有川孝行 市村哲二 小野恭一 梶ヶ山梨沙 崎山健文
春山直人 藤井大祐 松原典明 宮下愛

註

- 1) 鹿児島島津家墓所は鹿児島市薩摩藩主島津家墓所、始良市越前(重富)島津家墓所、始良市加治木島津家墓所、垂水市垂水島津家墓所、指宿市今和泉島津家墓所、さつま町宮之城島津家墓所の4市1町7箇所が連携して石造物、文献、発掘などの調査を進めた取り組みである。その成果は、各自自治体において報告書としてまとめられている。
- 2) 松原典明氏より宝塔として理解する方が良いとの御教示を得た。
- 3) 智姫は文化12年12月28日生まれ。母は御由羅で、御由羅は斉興と参勤交代を同伴している事もあるため、文化12(1815)年5月25日に江戸を出発する際、御由羅を同伴させていた可能性も十分に考えられる。更なる文献調査を要するため、ここではこれ以上の言及は控えたい。
- 4) 検討を要する事例として、重豪の子で病を理由に養子先(有馬家)から島津家に戻った久昵墓がある。『御祭祀提要』では埋葬地は長谷場西とされている。この長谷場西とは、『忠義公史料』第6巻551でわかるように恵燈院を指す。重豪墓手前にある現在の姿は改葬後と考えられる。久昵は文政2(1819)年に養子先から戻った後、小笠原氏女を母として文政6(1823)年1月に善次郎が生まれる。その善次郎は斉興の養子になるが、同年2月に江戸で夭死し、福昌寺跡には宝塔が残る。すなわち、宝塔招魂墓である。その9年後の天保5(1834)年に久昵は亡くなっている。これまでの検討結果に照らすと、江戸で亡くなり鹿児島には招魂墓が造られるはずだが、『御祭祀提要』の記述とは合致しない。
- 5) 例えば、末川久救(周山)の夫婦墓が南林寺に現存するが、南林寺墓地は大正8(1919)年に墓地廃止を受け江戸期の姿は見られない。だが、末川家墓所の全体図は、黎明館企画展「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」において紹介されたように、弘化2(1845)年の「末川家先祖代々之墓地図式」として記録が残されている。この他に、町田家にも墓石や碑文などが記された『墓表図記』があり、祖先祭祀や家の来歴などの家譜編纂も含めたかたちで残されている事例も見受けられる。このような記録類の集成作業も必要と考えている。

引用・参考文献

- 始良市（2018）「蒲生御仮屋日帳」『始良市誌史料六』
- 始良市教育委員会（2019）『始良市島津家墓所調査報告書』
- 秋池 武（2010）『近世の墓と石材流通』高志書院
- 上野堯史（2019）『薩摩藩の参観交替－江戸まで何日かかったか－』ラグーナ出版
- 大木公彦（2015）「鹿児島に分布する火砕流堆積物と溶結凝灰岩の石材」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』12 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設・鹿児島国際大学ミュージアム
- 大木公彦（2019）「第2節 始良市の大地 始良市の地質と構造発達史」『始良市誌第1巻 先史・古代編自然編』始良市
- 尾口義男（2018）「文政から嘉永期の「蒲生御仮屋日帳」について」『始良市誌史料六』始良市
- 鹿児島市教育委員会（2017）『薩摩藩主島津家墓所（福昌寺跡）調査報告書』
- 鹿児島県（1976）『鹿児島県史料 旧記雑録追録6』
- 鹿児島県（1977）『鹿児島県史料 旧記雑録追録7』
- 鹿児島県（1979）『鹿児島県史料 忠義公史料』第6巻
- 鹿児島県（2011）『鹿児島県史料 名越時敏史料一』
- 五代秀堯（1843）『三国名勝図会』
- 田村省三（1991）「一資料紹介－「御祭祀提要」『尚古集成館紀要』第5号 尚古集成館
- 平田信芳（1995）「二瀬戸石の盛衰」『石の鹿児島』南日本新聞開発センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第13号

発行年月 2021年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
